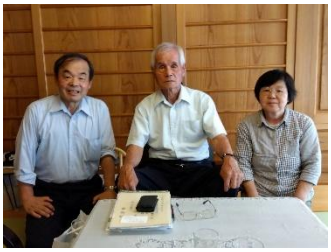
一般社団法人すてきな大分を伝える会

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

2025.7.19

広瀬淡窓の門下生　長（ちょう） 三洲（さんしゅう） を知る！　ご報告



高倉勇様（中央）

皆さんこんにちは。夏本番を迎え如何お過ごしでしょうか。

今回、特別に皆様に知っていただきたいと思い、報告をさせていただきます。それは、先回の「**豊後三賢広瀬淡窓**」の講話会の後、参加されたご婦人から「**実は、私の日田の実家は、広瀬淡窓の門人であった長三洲を幼いころお預かりし、育てたところです**。父（高倉勇氏）はもう 90 歳になるのですが、**長三洲の事をもっと広く知ってほしい**と願っています」とのお話を頂きました。長三洲のことは、実は私はよく知りませんでしたので、ウィキペディア等で調べますと、なかなかの人物であることが分かり、更に知りたく思い、この度高倉様に**日田にて面会**をさせて頂きました。

長三洲

高倉様は、ご自宅に迎えてくださり、**三洲の評伝『没後百年記念誌 才翁 長三洲先生』（中島三夫著）**や**三洲の『著作選集』**等を紹介くださいました。そのお話や資料を見せて頂く中から、**長三洲は、大分県人として誇りある素晴らしい人物**であることがわかってきました。今回は、その一端をご報告させて頂きます。

【長三洲の主な足跡】1833-1895

・淡窓の私塾「咸宜園」を優秀な成績で卒業、勤王の志士として国事に奔走する。
・**薩長同盟の立役者の一人**。同盟成立の前年に長州藩主の親書を**西郷隆盛に大宰府で手渡す**。
・**山口藩の藩政改革に携わる**。明倫館の運営改善や小学規則制定を託され教育改革を進める。
・明治 3 年上京、**太政官制度局の官僚**になる。明治 5 年**文部官僚**として、**日本の学制の礎を築く**。
・**新封建論を著し、「廃藩置県」を主唱**する。この反響大きく大勢を動かす。
・明治の書家の第一人者で、**近代学校制度の中に『習字』を取り入れる**。
・漢詩・書・画・篆刻も有名。**漢学の長三洲、洋学の福沢諭吉**として明治前半期の教育界の双璧を成す。
・**明治天皇の永代の侍書侍読**として仕えた。

ご参考　長三洲　のこと

《誕生～咸宜園卒業まで》

1．長三洲は、母親が厄年の時に生れたため、「捨て子」として高倉家（高倉勇氏の家）に預けられました。10 歳の時、母に連れられて英彦山で塾を開いている父（長梅外）のもとに行き、**父より漢詩や書道の薫陶**をうけました。三洲は、**この時すでに四書五経や論語を祖父や母から教わっていた**といわれます。

2．父のすすめで **13 歳の時、咸宜園に入塾**しました。しかし学資が払えず在籍のままでしたが、授業に出席できず英彦山に帰りました。**三洲は、ここで腐ることなく、一段と父につき猛勉強します**。翌々年の 1 月になりアルバイト先も見つかり 15 歳で咸宜園に出席できるようになったのでした。

3．淡窓先生は、非凡な三洲の才能を見抜いていたといわれます。三洲は、自分の力を試す時がきたと数々

の厳しい試験を乗り越え、成績表の『月旦評』で、最下位の無級から最上級の９級上まで**19 段階ある階段を在塾２年８カ月**（途中８カ月の休業を除く）**という短期間に、年齢わずか 18 歳で到達**し、卒業したのでした。三洲の立派なところは、その塾の達成体験を自らのものだけに止めず、後に続く弟達に次々と咸宜園入塾へとつなげたことでした。

４．淡窓先生の餞（はなむけ）のことば

三洲は、塾を去るにあたり、**生涯守り行うべき座右の銘**を淡窓先生にお願いしました。淡窓先生は、日ごろから「神童」と呼ばれる三洲を頼もしく思っていたましたが、将来のことを見すえ与えた言葉は、「**我その才子たるを望まず、才翁たるを望む**」というものでした。また、「友多き友の中にも友ぞなき沈むも浮くも友にこそよれ」「たぐいなき才子と云われても老いたる人の知恵を借るべし」と**生涯謙虚に学ぶことを忘れるなと戒めた**のでした。三洲は、恩師の書を床の間に掛け、固く守ったといわれます。

《幕末から明治新政府での活躍》

１．薩長の橋渡しを務める

幕末の頃は、大阪や九州各地を回り国内の情勢をつかんでいく中から尊王攘夷の志を固め、長州藩が、孤立無縁の中にある時、身を投じて**長州藩を支援**していったのでした。英米仏蘭の四国連合艦隊に下関が攻撃を受けた時、奇兵隊中隊長として防戦し、この時に頭部を負傷しました。この長三洲の姿に信頼を寄せた**長州藩主は、薩摩への橋渡し役として三洲を選び、自らの親書を西郷に渡す役目を託します。三洲はこの役目を立派に果しました。**三洲は、漢詩人でもあり、この時自らの**漢詩「孤憤一遍七百二十言**」を添えています。**三洲が、西郷に「長光太郎でございます」と名乗ると「おお、長三洲先生」とすでに三洲のことを西郷は知っていたのでした。**また、二人は語り合う中で打ち解け、西郷は長州藩が孤立し払われた数々の犠牲に涙し、三洲の説く「勤王倒幕」に共鳴したと言われます。

２．明治新政府の教育の基本である「学制」の草案を起草

明治に入り、三洲は、**木戸孝允の意を受けて上京**しました。**制度局に入り、国造りの骨格にかかわる議論に加わり、草案作成の重責を担い**ます。その中で三洲は、学制取調掛を命じられ、ここで**「学制五篇」を書き**、これが、**明治学制の骨格**となりました。広瀬淡窓が精魂を傾けた**咸宜園教育（理念と制度）がここに生かされたとみることができます。**

長三洲生誕の地
（日田市天瀬町）

3.「廃藩置県」の円滑な推進に寄与

諸藩の反対が予想される中、**「新封建論」を新聞、雑誌に公表**し、これにより世論が動き、大きな抵抗もなく円滑に廃藩置県が推進できました。　維新三傑の一人の**木戸孝允が「廃藩置県の容易に行われたるは新封建論の力多きにある。」と長三洲の労を讃えた**のでした。

高倉勇様からのお話（補足）

長三洲からお礼の印としていただいた**日本刀の話**をしてくださいました。これは、４年前に**咸宜園に寄贈**されましたが、**藤原行長の銘のある名刀（豊後刀）**で、三洲が一時、幕府から追われる身であった時、命がけで守ってくれた高倉家への恩返しの品でした。高倉様宅のすぐ近くには、**三洲生誕の地**があります。ここは今**『長三洲記念公園』**となり、その中に立派な**「長三洲先生之碑」が建てられています**。ここにいつか**長三洲の胸像を建てることが今一番の夢です**と熱く話されました。（青井勝久記）

2025.12.25 一部加筆